

高齢者支援等の社会活動への参加とその効果について

研究員 松吉 夏之介

目次

- | | |
|-------------------|------------------|
| 1. はじめに | 3. 助け合い活動を広げるために |
| 2. 社会活動に参加することの効果 | 4. おわりに |

1. はじめに

今年6月、内閣府から令和4年版高齢社会白書が公表された。同白書は、高齢社会対策基本法に基づき毎年国会に提出されている年次報告書で、高齢社会対策¹として政府が講じた施策や今後講じようとする施策等がまとめられている。内閣府では毎年、白書の内容等を検討するにあたっての基礎資料とするべく、また、今後の高齢社会対策の推進に資することを目的に調査を実施しており、その調査結果の一部を白書で紹介している。令和4年版の白書には、昨年12月に実施した「高齢者の日常生活・地域社会への参加に関する調査」の結果が掲載された。

筆者は本誌No.174およびNo.178において、高齢者への日々の生活支援を行うインフォーマルな活動である「助け合い活動²」に触れたが、その活動は、例えば、集い・通いの場（サロン）を提供することで、利用者が社会参加し、地域からの孤立を防ぐ効果が期待できることに言及した。一方で、サービスを提供する側（協力会員）においても、活動に参加することで、地域とのつながりや交流、生きがいをもたらさうとと考えられる。本稿では、

助け合い活動等の社会活動に参加することで期待できる効果等について考えてみたい。

2. 社会活動に参加することの効果

高齢社会対策大綱（平成30年2月16日閣議決定）³には、「高齢者が年齢や性別にとらわれることなく、他の世代とともに社会の重要な一員として、生きがいを持って活躍したり、学習成果をいかしたりできるよう、高齢者の社会参加活動を促進する」ことが掲げている。少子高齢化の進展に伴い、一人暮らしの高齢者が増加するなか、地域や人と関わり続けることが重要とされるが、社会活動に参加することは孤立や孤独を防ぎ、心身の健康や生きがいにつながるといわれる。

(1) 内閣府の調査結果

前述の「高齢者の日常生活・地域社会への参加に関する調査」では、社会活動の内容として、趣味（俳句、詩吟、陶芸等）、健康・スポーツ（体操、歩こう会、ゲートボール等）、生産・就業（園芸・飼育、シルバー人材センター等）、教育関連・文化啓発活動（学習会、子ども会の育成、郷土芸能の伝承等）、生活環

1 「就業・所得」、「健康・福祉」、「学習・社会参加」、「生活環境」、「研究開発・国際社会への貢献等」、「すべての世代の活躍推進」の6つの分野ごとに基本的施策を定めている。

2 本稿では、活動主体を限定しない場合は「助け合い活動」、JAグループにおける活動に限定した場合は「助け合い活動」と分けて表記する。

3 <https://www8.cao.go.jp/kourei/measure/taikou/h29/hon-index.html>

境改善（環境美化、緑化推進、まちづくり等）、安全管理（交通安全、防犯・防災等）、高齢者の支援（家事援助、移送等）、子育て支援（保育への手伝い等）、地域行事（祭りなどの地域の催しものの世話等）の9つの項目を設定し、それらの活動への直近1年間における参加の有無等を聞いている。そして、調査結果のうち、社会活動への参加の有無と日常生活全般の満足度、生きがいを感じている程度との関係を示したものが表である。

それによると、社会活動に参加した人では日常生活全般に満足していると回答した割合が82.0%（「満足している」と「まあ満足している」の合計）であるのに対し、参加していない人では70.8%となっている。また、社会活動に参加した人では生きがい（喜びや楽しみ）を感じている割合（「十分感じている」と「多少感じている」の合計）は84.5%であるのに対し、参加していない人では64.2%であった。何らかの社会活動に参加していなくとも、日常生活に満足している割合、生きがいを感じている割合は7割前後を占めるが、参加した人の方がそれぞれの割合は高くなっている。

また、同調査では社会活動に参加したと回答した人（1,237人）に参加して良かったと思うことを聞いているが、「生活に充実感ができた」（47.9%）、「新しい友人を得ることができた」（36.5%）、「健康や体力に自信がついた」（33.1%）、「地域社会に貢献できた」（31.6%）、「お互いに助け合うことができた」（26.0%）の順で回答割合が高くなっている。社会活動への参加により、生活が充実し、新しい友人を得るきっかけが生まれ、孤独感の解消につながる事が示唆されている。

飯島（2018）では、社会参加がフレイル（虚弱）予防につながり、健康寿命の延伸をもたらすことに触れている。健康長寿には、栄養

（食事・口腔機能、嚥下機能）、運動（身体活動など）、社会参加（就労、余暇活動、ボランティア）の3つの要素が重要とされるが、社会とのつながりを失うことがフレイルの入り口となる。社会参加は、生きがいや社会とのつながりをつくり、さらに健康づくりにつながるといえる。

（2）助け合い活動への参加がもたらす効果

高齢者の日常生活支援等を行う助け合い活動は、社会活動の一つに位置付けられるが、その活動の効果・意義を考えると、利用者ニーズの充足や公的制度を補完する役割、地域コミュニティの形成を促す仕組みとして、利用者の視点で評価される場合が多い。また、宮垣（2005）は、住民参加型在宅福祉サービス団体（助け合い活動団体）を対象とした内閣府の調査を振り返り、当該サービスの利用者と提供者の多くがともに同一の地域住民、かつ同一の組織の参加者であり、助け合い活動は時間の経過とともに利用者と提供者が入れ替わる構造（相互性）を持つと指摘する。これは、提供者が年を重ねるなかで何らかの支援を求めて利用者となるケースと、利用者がサービスを利用したことにより通常の生活を送ることが可能となり、恩返しとして提供者となるケースを想定したものである。そして、こうした助け合い活動の構造は、利用者と提供者が情報を共有する仕組みであることから、「利用者・提供者間の情報の不確実性の解消につながり、福祉サービス利用において欠かせない「信頼」という観点から有効である」と評価している。

助け合い活動の利用者、協力会員ともに社会活動に参加している当事者であり、利用者だけでなく協力会員にとっても、生きがいや社会とのつながり、健康づくりの効果があることは当然想定しうる。先行研究においても

(表) 社会活動への参加の有無と生活満足度・生きがいの程度の関係

(%)

	全体 (N=2,435)	日常生活全般の満足度				生きがいを感じている程度				N	
		満足 している	まあ 満足 している	やや 不満 である	不満 である	十分 感じて いる	多少 感じて いる	あまり 感じて いない	まったく 感じて いない		
この1年間に活動または参加した	50.8	17.7	64.3	15.3	2.5	30.2	54.3	10.7	0.6	1,237	
活動または参加したものはない	41.7	11.6	59.2	21.9	6.2	16.4	47.8	26.3	4.8	1,015	
活動または参加した内容 (複数回答)	趣味	14.5	23.2	62.4	11.3	2.5	35.0	52.0	7.3	-	354
	健康・スポーツ	26.5	17.8	65.9	14.4	1.6	30.5	57.5	8.1	0.5	645
	生産・就業	6.8	21.7	56.6	17.5	4.2	34.3	49.4	12.7	0.6	166
	教育関連・文化啓発活動	4.5	25.5	63.6	9.1	1.8	46.4	44.5	5.5	-	110
	生活環境改善	9.8	18.4	64.9	14.2	2.1	33.1	54.4	6.7	0.8	239
	安全管理	5.9	21.7	64.3	11.2	2.8	37.1	49.0	9.1	1.4	143
	高齢者の支援	2.3	19.6	58.9	17.9	3.6	35.7	55.4	7.1	-	56
	子育て支援	2.1	21.6	64.7	11.8	2.0	43.1	52.9	3.9	-	51
	地域行事	12.8	16.0	67.0	14.1	2.6	32.4	53.8	8.7	0.6	312
	その他	2.1	21.6	54.9	21.6	-	37.3	43.1	13.7	2.0	51

(出所) 内閣府「令和3年度 高齢者の日常生活・地域社会への参加に関する調査結果 (https://www8.cao.go.jp/kourei/ishiki/r03/zentai/pdf_index.html)」を基に筆者作成。

※「Q22 この1年間の社会活動への参加」と「Q1 日常生活全般についての満足度」、「Q39 生きがいを感じている程度」の質問間クロス集計結果。

しばしば、助け合い活動の担い手(協力会員)の社会活動への参加の意向を援助し、担い手の生きがいにつながることが指摘されている(小林 1994など)。助け合い活動は、利用者と協力会員の両者を助ける活動といえるだろう。

3. 助け合い活動を拡げるために

(1) 助け合い活動の課題

助け合い活動には、協力会員に対しても生きがいや健康づくり等をもたらす効果が期待できるが、その確保が課題として挙げられる。

例えば、中村(2009)は、東京都下の住民参加型在宅福祉サービス団体(12団体)の管理者・コーディネーターを対象に聞き取り調

査を行い、各団体に共通して、担い手不足が最大の課題であり、サービスの需給双方に担い手確保を制約する背景が存在することを明らかにしている。こうしたサービスは日々の生活において「楽をする」「水準を落とさない」ことに直結するサービスであるため、いったん利用が開始されれば、長期的に継続されることが多く、利用者側からサービスの縮小や終了の申し出があることはきわめてまれであると指摘する。他方、サービスを提供する協力会員は主婦が中心であり、家庭生活を犠牲にしない程度での関わりを求めていることから、サービスの利用依頼が増加しても、個々の協力会員にサービス従事時間を増やすよう

促すことが困難であると言及している。また、永田ら（2017）は、「介護予防・日常生活支援総合事業」に取り組む自治体への聞き取り調査を行い、介護予防等の生活支援サービスの提供活動を助け合い団体（地域住民）へ委託するうえでの課題等をまとめている。そのなかで、担い手の養成・確保が課題となっていることを述べたうえで、実際にサービス提供の担い手の養成や活用が順調に進んでいる自治体においても担い手の中心となっているのは中高年層であることを指摘する。今後は、それらの人々が利用者側にまわることから、担い手の一層の不足が懸念され、地域の実情に沿って、担い手の対象年齢層の拡大とその連携の方法を確立していくことが必要としている。

J Aの助けあい活動においても、活動を担う協力会員を増やすことは大きな課題といえよう。特に、J Aの助けあい活動は前身・基盤がJ A女性部であること、協力会員自身がJ A女性部の活動を兼務していることが多いため、必然的に女性が協力会員の多数を占めることになる。いかに男性の協力会員を増やしていくかも重要ではないだろうか。ただし、准組合員等の地域社会から離れた場所で働き続けてきた人が、定年退職後に地域社会と関わりを持ち、新たな人間関係を築いていくことはなかなか容易ではないと思われる。女性メンバーのコミュニティに入っていくことを躊躇ってしまう場合も多いだろう。

(2) 男性が助け合い活動の担い手に

男性が助け合い活動に参加している事例では、多くのメディア等で取り上げられる愛知県の南医療生協の取り組みが挙げられる。南医療生協は管轄地域の各支部と事業所が結びつき、総合的な地域医療を展開しており、診療所に介護福祉施設を併設し、医療・介護サービスを一体的に提供する等、地域包括ケ

アシステムの先駆けといわれている。組合員活動も活発に行われており、その活動の一つに、定年退職後の男性が集まり、近所の困りごとを解決する「男塾」がある。外出が難しい高齢者の散髪や草木の伐採、家具の移動、ゴミ出し、飼い猫の搜索、一人暮らし高齢者の話し相手等、多様な活動を行っている。

J Aの助けあい活動においても男性が積極的に参加している事例は散見される。2021年11月28日付けの日本農業新聞の記事では、和歌山県のJ Aわかやまの「やろう会」、J Aありだの「ハリキリ隊」、J Aながみねの「男の道楽塾」、徳島県のJ Aとくしまの「男のまかない塾」、そして高知県のJ A高知県の「赤い禪（ふんどし）隊」を紹介している。同記事によると、「赤い禪隊」は男性による助けあい活動の先駆けで、庭木の剪定をはじめ、男手があると助かるボランティア活動や竹ぼうき作り、味噌づくり、料理教室など、活動内容は幅広い。また、この3県では、新型コロナウイルス感染症の流行前には県をまたいだ交流会も盛んに行われていたようである。こうした活動が生まれたきっかけは、女性部や女性の助けあい活動が主催した男性向けの「料理教室」や「勉強会」に集まったメンバーが「せっかく知り合ったのだから、自分たちも地域のために…」と立ち上がったケースが多い。一つの活動が新たな活動を生み出したといえるだろう。

また、小川（2012）によれば、前述の「赤い禪隊」の規約の第1条に「生活を楽しむことや生活に役立つことを学び、男性ならではの活動の実施と相互交流をはかり、さらに男らしい生き方を目指すことを目的とする」とあり、「自分たち自身で楽しむ活動」を活動の柱の1つに位置付けている。隊員（参加メンバー）は、「活動を通して地域に役立つことを実感し、地域における自分の立ち位置

を確立する。そして活動自体を楽しむことで、自らの生きがいに活動をリンクさせている」と指摘している。

4. おわりに

少子高齢化が進展するなか、地域における助け合いの活動は今後ますます重要となってくるだろう。助け合い活動は、時間の経過等により利用者とサービスを提供する側が入れ替わる構造、困ったときは「おたがいさま」の精神が根付いているが、どちらかがどちらかを助けるということだけではなく、利用者とサービスを提供する側の双方の生きがい（助け）となる活動といえる。コロナ禍や様々な制約により、活動に参加し、継続していくことは必ずしも容易なことではないかもしれない。今後、前述の男性メンバーを中心とした活動等について、あらためて活動背景や内容等の詳細を調査し、助け合い活動が生まれ、継続していく要因等を考えていくこととした。

(脚注以外の参考資料・論文)

- ・内閣府「令和4年版高齢社会白書」
https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2022/zenbun/04pdf_index.html
- ・内閣府「令和3年度 高齢者の日常生活・地域社会への参加に関する調査結果」
https://www8.cao.go.jp/kourei/ishiki/r03/zentai/pdf_index.html
- ・松吉夏之介（2021）「高齢者の生活を支える地域の助け合い活動について」一般社団法人JA共済総合研究所『共済総研レポートNo.174』pp. 28-33
- ・松吉夏之介（2021）「高齢者への生活支援について－地域住民主体の助け合い活動を事例に－」一般社団法人JA共済総合研究所『共済総研レポートNo.178』pp. 22-27

- ・飯島勝矢監修（2018）『健康長寿 鍵は“フレイル（虚弱）予防”自分でできる3つのツボ』クリエイツかもがわ
- ・宮垣元（2005）「福祉NPOの社会学的理解に向けて－住民参加型在宅福祉サービス団体の組織特性－」福祉社会学会『福祉社会学研究2005 巻2号』pp. 33-50
- ・小林良二（1994）「住民参加型在宅福祉サービスへの参加意識－調布ゆうあい福祉公社を中心として－」国立社会保障・人口問題研究所『季刊・社会保障研究 第29巻第4号』pp. 312-321
- ・中村義哉（2009）「介護保険制度下の住民参加型在宅福祉サービス－地域の「支え合い」の現状と課題－」日本社会福祉学会『社会福祉学 第49巻第4号』pp. 117-130
- ・永田志津子・林美枝子（2017）「介護予防・日常生活支援総合事業における住民主体サービスの可能性と課題－大阪府および北海道の事例から－」札幌大谷大学『札幌大谷大学社会学部論集 第5号』pp. 75-99
- ・南医療生活協同組合ホームページ
<http://www.minami.or.jp/introduction/top/index.html>
- ・下野新聞「企画 なぜ君は病に… 社会的処方 医師たちの挑戦 第7部 支え合う未来へ」2021年5月1日朝刊
- ・日本農業新聞「【論説】JAの男性組織 地域活性化の担い手に」2021年11月28日
- ・小川理恵（2012）「地域をデザインする女性力－高知県・JAコスモスの女性活動に学ぶ」社団法人JC総研（現 一般社団法人日本協同組合連携機構）『JC総研レポートVol. 23』pp. 37-43